

日蓮教学における罪と救い

原 慎定（立正大学）

自己とは何か、人間存在とは何か。この問題はわれわれ人間にとって永遠のテーマであり、それゆえ宗教において根源的に問われなければならない課題であろう。宗教の世界を主体的に受けとめようとするとき、なんらかの意味で人間を相対化する視点が想定され、そこから人間の実存が照らし出されなければならない。そこには概ね人間存在の有限性、もしくは卑小なる存在としての自己認識、あるいは汚濁に染まり穢れた存在としての自己省察などが求められる。そうした実存的認識に立脚して、人間のあるべき姿を探求するのが宗教の基本構造であろうと考えられる。

鎌倉新仏教の代表的祖師のうち、親鸞は人間を煩惱愚縛の凡夫として捉え、道元は人間を無常の存在と規定する。その認識を踏まえて、親鸞は阿弥陀仏への絶対帰依—「信」を強調し、道元は只管打坐による「永遠の今」の体現を強調している。それでは、法華経至上主義に立脚し、「妙法五字」による一切衆生の救済を力説した日蓮は、人間存在をどのように捉えたのであろうか。

日蓮は法華経を「明鏡」として受けとめ、自己および歴史的現実を照射したが、そのとき末法の時代社会に生きるすべての人間存在は「謗法」という罪の状態にあると主張した。「謗法」とは「誹謗正法」の略であるが、単に仏法の道理や因果を否定したり、法華経を謗ることだけを意味するのではない。むしろ法華経に開顕された教主釈尊からの「信の要請」に違背することが問題とされ、仏法を恣意的に解釈したり、無批判的な仏法受容や自己満足的な信仰に立つことが「謗法」とみなされる。しかもこの罪は、自分で覚知することが困難であるため、法華経信奉者の中にも潜在することになる。

日蓮は自己に内在する罪を深く省察した上で、他宗の人師の仏法受容のあやまちを問題提起し、弟子・信徒にも罪の覚醒を促している。日蓮が法華経に予言された法難を覚悟してこれを忍受し、「法華経の行者」としての弘経活動を貫徹したのは、苦難の体験を通して末法の日本国に法華一仏乗の教えを機能させるためであったと考えられる。

そこで本発表では、潜在的な罪の顕在化という観点から日蓮における受難の意義を検証し、法華経の精神に反発する存在（悪知識の提婆達多）に対する「敵こそ我が師なり」の理念と実践、阿闍世の罪と救い、常不軽菩薩の受難と滅罪、逆縁下種の論理などを視点として、日蓮教学における罪と救いの構造的な特質を解明しようとするものである。

キーワード：「謗法」「法難」「逆縁」